

看護師が患者から症状を聞いたり、生活指導をしたりする「看護外来」を設ける病院が増えている。がんや糖尿病など、特定分野で専門的な知識や技術を持つ看護師らに、病气だけでなく生活全般の支援が受けられると評判だ。  
(本田麻由美、写真も)

今日7日、大阪市中心部にある北野病院1階の糖尿病看護外来。認定看護師の中山法子さんは、岡村英嗣さん(66)の足をお湯で洗った後、糖尿病性のツメの病変を観察しながら、「だいぶ良くなりましたね」と、笑顔で声をかけた。

# 糖尿病、がん……増える「看護外来」

30歳代後半で糖尿病と診断された岡村さんが、医師の勧めで看護外来に通い始めたのは昨年8月。足の神経障害などの合併症が進み、ちよっとした傷から化膿や壊死を起すこしかねない状態に、「先生の手に負えなくなったから見放されたんや。看護師に口うるさく言われても、どうせ良くなるん」と思ったという。

認定看護師 質の高い看護師を養成するため、1995年に日本看護協会が創設した資格。実務経験通算5年以上などが審査を受ける条件。5年ごとに更新審査が行われる。「糖尿病」「皮膚・排せつケア」など19分野あり、4458人。大学院修士課程修了者などを対象とした専門看護師(94年創設)もあり、「がん」「精神」や、今年4月に新設された「家族支援」など、10分野で2338人。



「糖尿病とは30年来のつきあい」という岡村さんに、フットケアを行う認定看護師の中山さん(左)(大阪市の北野病院の糖尿病看護外来で)

## 専門性生かし 生活全般を指導

岡村さんの心情が伝わってきた。一方、問題点も見えてきた。商社の営業部長という立場から、低血糖で倒れてはいけないうブドウ糖を頻りに飲み、逆に高血糖を招いていた。食事の30分前に自己注射するインスリンが処方されていたが、忙しくて忘れることも多かった。

そこで、中山さんは、食事の直前に注射するタイプの薬に変更することを提案。低血糖を起こさない体調の管理法などを指導したところ、徐々に血糖値が下ががり、最近では、かなり数値が改善した。岡村さんは、「結果が出ると、また頑張ろうという気力もわく。以前は、なかなか改善しないので医師に責められているように感じていたが、中山さんは生

活の中でどうしたらいいかを具体的に、わかりやすく説明してくれるのがいい」と笑う。

＊

同病院の糖尿病看護外来は、昨年7月に開設。以来、1人30分ほど時間をかけ、月100人以上の患者を5人の看護師で診ている。

「この外来に出合っ、人生が変わった」と感謝するのは、井上智子さん(37)だ。

井上さんは24歳で1型糖尿病と診断され、血糖コントロールができていなかったこともあり、結婚後も、「私には出産は無理」と思い込んでいた。それが昨年、この外来で妊娠のことを聞かれ、妊娠できることを知った。

「医師は糖尿病の治療のことしか言わなかったの、あきらめていました」と井上さん。その後、夫婦で体調管理に努め、今日1日、待望の長男、寧生くんを無事出産した。

「医療が高度で複雑になり、医師の説明だけでは理解するのが難しくなっている。忙しい医師にはなかなか細かい疑問点まで聞けず、それが不信や不満につながっている」と、同病院の松川みどり看護部長は言う。そのうえで、「生活全般をケアする看護師が、専門性を生かし、患者が納得して治療できるように支える必要性が高まっている」と強調する。

＊

厚生労働省は昨年12月、深刻化する

医師不足を受け、静脈注射や点滴、薬剤の投与量の調節、医師の治療方針の説明などは看護師ができる場合があるとする通知を出した。また、ストーマ(人工肛門など)ケアなど皮膚や排せつに関する看護に加え、今春の診療報酬改定で、専門知識や技術を持つ看護師が糖尿病による足病変のケアや指導をした際にも、報酬がつくことが認められた。看護師の役割を広げるこうした動きに合わせ、ここ数年、看護外来の数や扱

う分野は拡大している。禁煙支援やがん看護、リンパ浮腫ケアなどのほか、糖尿病フットケア外来も急増中だ。  
大阪大の瀬戸奈津子准教授は、「看護外来などで認定・専門看護師が活用されれば、生活習慣病の予防など、医療費の効率化にもつながる。医師不足への対策にもなるほか、『治すだけの医療から生活を支える医療へ』という、患者の期待に応えることもできる」と話している。



読売新聞 夕刊 2008年7月30日付  
※この記事は、読売新聞社の許諾を得て転載しています。